

華岳山恩林寺発行



# 頸飽袋 737

令和5年11月号



写真：鐵眼道光(宝蔵国師)像 黄檗山宝蔵院蔵



お寺へ行こう 和尚さんと友だちになろう

中山かんのん  華岳山 恩林寺

中山中学校下

☎506-0052 岐阜県高山市下岡本町2779

✉kagakuzan@onrinji.com ☎(0577)34-1245



<https://onrinji.com/>

## 鉄眼禅師を救った柳の一枝

これは鉄眼禅師が一切経（大蔵経）かんじんあんぎや全巻木版印刷の発願されて全国を勧進行脚をし、江戸からの帰り道での話です。

そんなことも知らない盗人は

鉄眼禅師の後ろを追いかけていました。「この和尚は大金を持っているに違いない。」場所は、木曾川の渡しとしか伝わっておりませんが、盗人はついに

和尚の隙を見て

体当たりするなり



和尚の胸ぐらから大切な寄進の

お金を取り上げ、逃げようとしてました。

和尚は大切なお金ですから体にしつかり巻き付けておりましたが、あまりにも咄嗟のことで川に転落してしまいました。

和尚は必死でしたが川に放り込まれたのではなす術はありません。木曾川は名だたる急流ですから、浮きつ沈みつ藻搔もがいているうちに手に当たった柳の一枝を掴んでようやく命拾いをしたのでした。

それから数年の後、日本中を

行脚する鉄眼禅師の姿は評判になり、一切経の木版印刷事業も順調に動き出しました。

版木を彫る場所は隠元禅師の後押しもあつて黄檗山内の宝蔵院が拠点となりましたが、全国行脚の拠点としては黄檗山は少し不便です。

そこで和尚は難波の地に場所を構える事とし、昔から難波の地にあつた薬師院を再興することにしました。浪速の人たちはこぞつて協力してくれました。

さて、この人たちの中に人一倍協力してくれる竹原という商人が

いました。和尚はその商人にお礼を言おうと竹原に会おうと、急に竹原の顔色が変わりました。

同時に、和尚も数年前の木曾川のことを思い出したのです。

この竹原こそが大切な勧進のお金を盗んだ盗人だったのです。

「お前さんはあの時の…」



「鉄眼禅師とは和尚さんのことだったのですか。」

二人の間で気まずい時間が流れました。竹原は正直に事の次第を話し始めました。

「私は何をしても失敗ばかりであの時はやけになっていました。

丁度その時お金をたくさん持っていたような和尚に出会いこの時と

ばかりに、必死であのようなことをしでかしました。しかしあのお

金を元手に商売を始めましたところ何をやってもうまくいき、

儲けたお金を何か為になる事に使いたいと思っていたところ薬師

院の再建を知ったのです。やはり

悪いことはできないものです。

どうかわたしをお役人に引き渡して下さい。」

鉄眼禅師はこの話を聞くうちに

気分が爽快になってきました。

「そうじゃろう。やはりあのお金

には皆さんの真心が詰まっている

からな。」鉄眼禅師は竹原を咎め

もせず笑って許してあげました。

薬師院の再興は順調に進み、

名前を瑞龍寺と改められました

が難波の人たちは親しみを込め

て今でも通称「鉄眼寺」と呼んで

おります。



住職合掌

小僧さんの



## 【第二章 八節】施粥廻り

京都は底冷えすると言われている。雲水衣も夏用から冬用に変わりましたが、冷えの原因である足は裸足のまま。寒い寒いと言いつつも耐える日々でした。そんな季節に「施粥廻り<sup>せしゆく</sup>」というものがあります。



12月に厳しい修行が八日あり、その期間を生き抜くために11月に托鉢をして廻るのです。

裸足に草鞋を履き、傘を被ったら出発です。学生の頃、当たり前に使っていた公共機関は乗れません。自分たちの足で京都を歩き回りました。一日に30キロメートル程。運動靴の有難さを痛感いたしました。



実は、僧堂のある寺院には托鉢に行つてはいけません。しかし、私はそのような事を知らず、宇治市にある興聖寺さまへ訪問してしまいました。しかし、寛大な和尚さんがおられ、無知な私を許してくださいました。「私のところの雲水も出払っている。」

折角ここまで来られたのならば一炷(30分)座っていかなかね。」私は入堂し、貴重な経験をさせて頂きました。お茶とお米(施粥)を頂戴し、本山に帰りました。



先輩は他の僧堂に訪問してしまつた私を責めましたが、同夏には笑われてしまいました。無事に施粥が集まりました。いよいよ12月より、厳しい修行が始まります。



**華岳山恩林寺**

住職 古田 正彦  
新堂 小森 鳳雅